



木之本漆器店 塗師 鈴木 千代枝さんに聞く

木之本漆器店 塗師 鈴木千代枝さん

漆塗り一筋50年。伝統の拭き漆で、箸や椀、ランチョンプレートなどを手がけ、現代における漆の魅力の発信に努めている。

お仕事の事などをお聞かせください。

鈴木さん 塗師をしています。漆を塗っては乾かす作業を繰り返して、さまざまな製品を手掛けています。

ランチョンプレートであれば、1枚あたり2カ月ほどかかります。ひと月に出荷できる製品としては、約10枚ほどになります。

また、店では一番の古株で、顧客との付き合いも長いことから、塗師ではありませんが来客時の対応や出荷などの作業も任されています。

職人となるきっかけを教えてください。

鈴木さん 中通り方面からこの漆器店近くに嫁ぎ、出産を機に専業主婦をしていたところ、先代の女将さんに誘われ、昭和37年7月頃に入店したのがきっかけでした。

当時は、塗師や木地師の職人さんがおり、私は塗師の下仕事を20年務めてきました。

職人さんが定年などで退職してからは、現代風の漆器を目指して、現在の女将さん

と取り組んできました。

漆塗りでの特徴的なことを教えてください。

鈴木さん 「変わり塗り」(下漆をしてから、燻炭を細かく砕いて、篩にかけた一定の粒子をふりかけ、その後、生漆や彩漆をスポンジなどで塗る)という技法を用いて、製作しています。

これにより、ハケで塗る「本塗り」の表面がツルツルしているのに対し、「変わり塗り」は、表面が凹凸して一味違った質感が表現できます。

エピソードなどをお聞かせください。

鈴木さん 先代のご主人が亡くなり、また、漆塗りの業界が低迷基調となった時、今の女将さんと二人三脚で、今後の店の展開などについて、大きな夢を語り合いながら、イベントなどへの出展に奔走していました。

また、独自の漆塗りの技法を身に付けるため、若松のハイテクプラザに2人で通い

ながら学習し、「変わり塗り」という技法を習得しました。

男女共同参画社会についてお聞かせください。

鈴木さん ここで働いているスタッフは、すべて女性です。それをアドバンテージと捉え、チームワークで表現の世界を広げています。

今後の展望についてお聞かせください。

鈴木さん 現在、後継者育成に力を入れてはいるものの、地味な仕事のため、人材の確保が難しい状況です。

この伝統工芸を後世に引き継ぐため、人材を確保・育成し店の発展へとつなげていきたいです。

鈴木千代枝さんの活動は市ホームページにも掲載

問 企画調整課 政策調整室
企画調整係
☎(24)5209